

解 答

- 一 ① 余念 ② 機知 ③ 発奮 ④ 疑 ⑤ 必至
 二 ① ありあまる ② ありあわせ ③ ありし ④ ありのまま ⑤ あらんかぎり
 三

問一 ア 問二 共通の基盤

問三 ③ 声をかけないことで、相手に自分たちの存在を強く意識させない〔という配慮。〕
 ⑤ 相手の話す権利を奪わないために、相手の話を最後まで聞く〔という配慮。〕

問四 イ 問五 イ 問六 ウ 問七 ウ

問八 〔テーブルの大きさが大きければ、〕お互に相手の存在を強く意識しなくてもすむから。

四

問一 オ 問二 イ 問三 イ 問4 ウ

問五 どんなに説得しても、家族みんながノラを飼うことに理解を示してくれないから。

問六 イ 問七 オ 問八 イ

解 説

三

問一 ほうせん傍線部①の次の段落に注目しましょう。最初の一文に、「この『どうも』の例などは、ことばによる実質的な情報の伝達というよりも、『あなたがそこにいることをわかっています、認識しています』とか、『あいさつが必要な場面だとわきまえています』程度の意味合いを伝えると思われます。」とありますね。この内容を的確にとらえているのは、「相手に気づいていることや軽い礼儀の気持ちを伝えるためのものに過ぎず、何か内容のあるものを伝えるためのものではない」と書いている「ア」となります。

問二 傍線部②の前後には、「アメリカ人の方は、こんな状況では、声をかけるのが自分たちの文化では礼儀だと思っていて」とあります。少し言葉を補って、「アメリカ人の方は、こんな状況では『アメリカ人ならみんな共通して声をかけるのだから』、声をかけるのが～と考えると、探すべき解答のイメージが浮かぶでしょう。あとは「みんな（共通して）持っている」というイメージと、設問の指示に従って五字の語句を探します。解答はかなり離れたところ（5ページの1行目）にありますが、最後まであきらめずに探ししましょう。

問三③ 傍線部③の前後に注目します。本文中のイギリス人は、「あたかもお互いの存在に気づかないかのようにふるまう（=何も言わない）」ことで、「『どうぞ私たちにおかまいなく』という意味」を示そうとしています。この二点をふくめて解答をまとめます。ただし、「『どうぞ私たちにおかまいなく』という意味」をそのまま使うと、「おかまいなくどうするのか」が曖昧ですので、「相手に自分たちの存在を強く意識させない」あるいは「自分たちの存在を気にしないようにする」などと言いかえましょう。

⑤ 傍線部⑤の二行前から読みましょう。「言いたいことは自分で最後まで言わせてほしいし、相手が話しているときにも、最後まで相手に話させてあげよう」という、「妻」の考えが書かれています。また、問六でも確認しますが、自分の話の最中に相手に割り込まれると「話す権利を奪われた」と思い、「妻」は残念な気持ちになるわけですね。解答には、「相手の話す権利を奪わない（横取りしない）」、「相手の話を最後まで聞く（相手に最後まで話させてあげる）」という内容をふくめればよいでしょう。

問四 傍線部④「このような経験」の指示内容は、2ページ後半から続く、アメリカ人とイギリス人の例です。これをまとめた部分を探すと、傍線部④の6行後に「このように」で始まる段落があり、ここには「どんな場面でことばを使うか、使わないかは、文化によっても期待されているものがちがいます。」と書いてあります。そして、これに気づかないと、「やがて一部のグループの人々に対する誤解・偏見につながっていくこともあります（傍線部④の直後）」という状態になるのです。この文意に近い選択肢を探しましょう。「ア」は、「もともと偏見を持ってしまっている」が×。「イ」には「まったく違う価値観を持っている人々」とありますが、価値観の違いに気づかないまま誤解するという文意に合いません。「ウ」は「礼儀作法には差があるということを思い知らされる」の部分が×。礼儀作法の差に気付いてはいません。また「オ」には「たとえ文化の異なる人々にでも積極的に話しかけなくてはならない」とありますが、先の例では、イギリス人同士の場合は黙っているのが礼儀ですから、これも×です。

問六 直前の「話す順番は自分だったのに横取りされた」に注目しましょう。「横取り」のイメージに最も近いのは、「割り込み」ですね。

問七 傍線部⑦の前に、「さきほどは、共有する沈黙で、『わかりあっている』親密感を確認しあう例について～」とあります。ということは、傍線部⑦は、お互いに「わかりあっていない（気持ちの伝わっていない）」状態での沈黙ですね。具体的にどういう気持ちだったのでしょう。まず「妻」は、問六で確認したとおり、「話に割り込まれた」

と残念に思っています。一方「夫」の気持ちは、Bの直前に「～という親しさの意図と、～という相手へのトップの意図の両方をこめて話していた」とまとめられています。この点に注意して、各選択肢を読みましょう。「ア」は、「夫は妻の気持ちもわかった上で～」の部分が×。「妻」の本当の気持ちは、後のインタビューで気づいたのです。「イ」は、「夫は～思いやりの気持ちで沈黙している」とありますが、夫の気持ちはこれに限定されるわけではないので×。「エ」は、「互いに相手に対する批判の気持ちを伝えるために沈黙」が不適。「オ」についても、「互いの真意がどれほど異なるかに驚いた」のは、後のインタビューの時ですから、本文に合いません。

問八 テーブルの大小によって、相手との距離が変わります。では、距離が変われば、相手に対する何が変わるのでしょうか。かれについては、問三③などがヒントになります。相席する相手が近くにいる場合と遠くにいる場合とでは、やはり相手の存在に関する意識が変わってくるのではないかでしょうか。解答例ではこの点をまとめました。もちろん、「自分の考え」を述べる設問ですので、これ以外の解答も考えられますが、採点者に意味が伝わるように、かつ本文の内容を理解した上でまとめましょう。

四

問一 傍線部①の直前に注目します。「～裏階段は、細長い庭をつきらないと外に出られないからえらく不便だ。／裏階段は、さびれている。人なんかめったにこない。」とありますね。つまり、「不便なので、めったに人が来ない」というイメージに最も近い選択肢を選べばよいのです。「イ」が紛らわしいかも知れませんが、「薄気味悪いから、人が来ない」という因果関係が、本文の内容とずれています。

問二 一見、正誤判断に迷う問題ですが、本文の内容に即して考えましょう。ここでヒントになるのは、傍線部①の、「のら猫にこっそりエサをやりたい男の子のためには、とても良い場所」という表現です。ここから、学はノラと出会ってから、裏階段に対して好印象を持っていることが分かります。せっかくの良い場所を妹にけなされるのは不愉快だ、という気持ちの読み取れるものを探ると、「イ」となります。

問三 「きけんな足音」とは、もちろんハイヒールの音です。もしかしたら「生き物が大きいな有沢のおばば」が接近しており、「ノラ」を世話する姿が見られるかもしれないから「危険」と判断したのであって、この段階ではまだ、誰の足音かはっきりしません。したがって「ア」の「ハイヒールの足音の主である理事長」のように、足音の主を断定した選択肢は不適。同様の理由で、「ウ」の「ハイヒールをはくような人はみんな理事長の仲間で」も×。また、「イ」の「ハイヒールの足音からは、あたかも危険が忍び寄っているような響きが感じ取れた」や「オ」の「ハイヒールの音が聞こえるということは、不気味なこと」のように、ハイヒールの音が何を暗示しているのか、具体的にふれていないものは、説明不足と判断します。

問四 傍線部④「それ」の指示内容は、直前の学のセリフ「ここには包丁しかないよ」です。これはノラに対しての発言ですから、「ここ」は「流しの下」を指します。よって「流しの下」にふれていない「ア・エ・オ」は×。また「イ」の「ノラが流しの下に何か食べ物がないかと探している」は学のかんちがいではないので、×です。

問五 傍線部⑤の直後に注目します。学の「こんなに、こんなにかわいいのに…」というセリフに対して、家族は「ぶんぶんとかぶりをふった(=否定する動作をした)」のです。学は、「こんなにかわいい」ノラを飼いたいのに、家族のだれもがそれを否定する。その状況にがっかりして、学はため息をついたのでしょう。これらを、文末表現などに注意しつつ、解答にまとめましょう。

問六 一見、解答の根拠がつかみにくい問題です。くるみが学の後ろからついてきた真意が、本文中には明確に書かれていませんからです。ですが、ここに設問を解くカギがあります。つまり、「くるみの真意がよくわからない」という内容の選択肢を選べばよいのです。すると「イ」に、「～妹のくるみが、なぜかつてきつたから。」と書いてあります。これは、「妹のくるみが、真意はよく分からぬがついてきたから。」と言いかえられる表現です。逆に、他の選択肢からは「真意が分からぬ」というニュアンスが読み取れません。

問七 「小さな声でノラを呼んだ」理由は、「大声で呼ぶと周囲に気づかれる危険があるから」です。このことを書いているのはイ・オだけですので、解答の候補はこの二つに絞られます。次にそれぞれの選択肢を見比べると、前半部分に大きな違いがあります。「イ」では「みんなの鈍感さに嫌気がさし」、「オ」には「家族に対する腹立ちから」とあります。学は誰に対して不快感を持っているのでしょうか。もちろん、家族に対してですね。したがって、このことを明らかにしている「オ」が、より適切と言えるのです。

問八 まず、「どのような場所」という問い合わせに対して一言で何と答えているか、各選択肢の最後の部分で確認すると、アから順に、ア=いまわしい場所、イ=かけがえのない場所、ウ=思い出深い場所、エ=大切な場所、オ=因縁の場所と書いてあります。これらのうち、明らかにおかしいのはア・オです。というのも、問一などで確認したように、主人公の学は、裏階段に対して悪い印象を持っていたとは考えられないからです。次に残りの選択肢をよく読めば、ウ・エもおかしいことが分かります。ウに「ノラと思う存分遊んだ」、エに「好きだけノラの世話をやってやることができた」とありますが、これだと学はノラに対して未練がないような表現ですね。もし未練がなかったら、最後の場面でノラを探したりしないはずです。